自助がつくる
新しい助け合い

住民流福祉総合研究所

木原孝久

福祉は「わたし」から発する。
「わたし」とは、この私でもあるし、あなたでもある。

「わたし」の中に困り事が発生する。
生きにくさの原因となるものから、自分らしい生き方を阻むものまでいろいろ。

①自力で解決できることは、自力で頑張る。
②他人の力が必要な時は、ＳＯＳを発信する。
①②を合わせて自助という。
③同じ問題を抱えた人同士が助け合うこともある。これを自助同盟と言う。

サービスは、まず自助同盟で受け、使い易くしてから、各自助が受け取る。
逆に、自助で解決できない分はサービスを作り易くしてから、公助に要望する。

目次

＜第1章＞世界一やさしくない日本人／４
＜第2章＞福祉は「助けて！」から始まる／７
＜第3章＞福祉は担い手と受け手の共同作業／１０
＜第4章＞自助とは「助けられ上手」のこと／１２
＜第5章＞やっぱり「人助け」の方がいい／１４
＜第6章＞当事者による助け合いの意義と課題／２０
＜第7章＞自助がやり易いエリアをつくる／２３
＜第8章＞本人と支援者で「自助マップ」作り／２６
＜第9章＞当面の困り事を、仲間と一緒に解決／２７
＜第10章＞公助と自助をつなぐ「自助同盟」／３３

<第1章>世界一やさしくない日本人

■英国の福祉機関ＣＡＦの調査･「あなたはこの１か月で見知らぬ人を助けたか？」で日本は１１４か国中１１４位。つまり最下位。「助けた」と答えたのは１０人に１人。

■ちなみにベストテンの中の６か国がアフリカで、「助けた」と答えたのは１０人のうち７～８人。

■調査は１０年以上続けられていて、日本は１０年間の平均でも最下位だ。

ロンドンで娘が出会った光景

娘がバスに乗ったら、席はもう埋まっていた。そこに妊婦が乗ってきたので、席を立とうとしたら、それよりも早く、本人が「私は妊婦なので、どなたか席を譲っていただけませんか？」と声を上げた。するとすぐに、近くの女性が「それなら私が」と立ち上がった。英国に滞在中、娘はこのような場面に何度も出会ったという。

「助けて」と堂々と言える国なら、誰でも気軽に人助けをするはずだ。

私は納得した。こういうふうに頼まれたら、私だって席を立つだろう。なるほど、あの英国機関の調査で、日本と他の国が段違いなのは、こういう事情が絡んでいるのではないか。

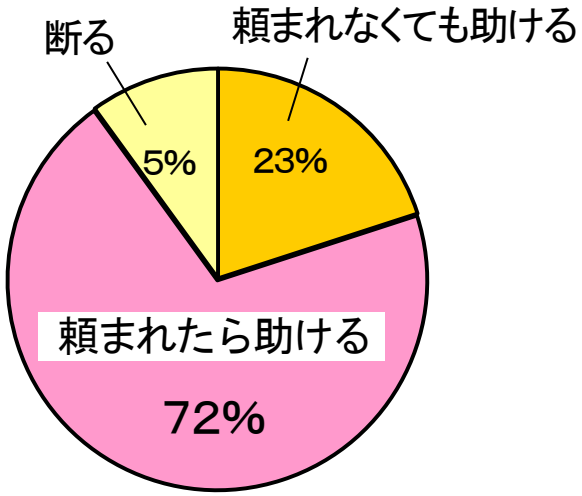
そういえば長野県須坂市が、住民を対象にこんな調査を実施した。

「困っている人がいたら、あなたはどうしますか？」その結果はこのグラフのとおり。

「頼まれたら助ける」という人が７２％。

つまりほとんどの日本人は、受け身の善意の持ち主だった。

ならば、積極的に助けを求めればいいわけだ。



助け上手より、助けられ上手を育てた方が早道かも。

これまで、福祉のまちづくりのキーワードは「やさしさ」だった。人々がやさしくなれば、福祉のまちになると思われてきた。

しかし、やさしい人（積極的に人を助ける人）をたくさんつくるのは、日本では難しい。それよりも、人からやさしさを引き出す「助けられ上手」を育てた方が、早く福祉のまちができるのでは？

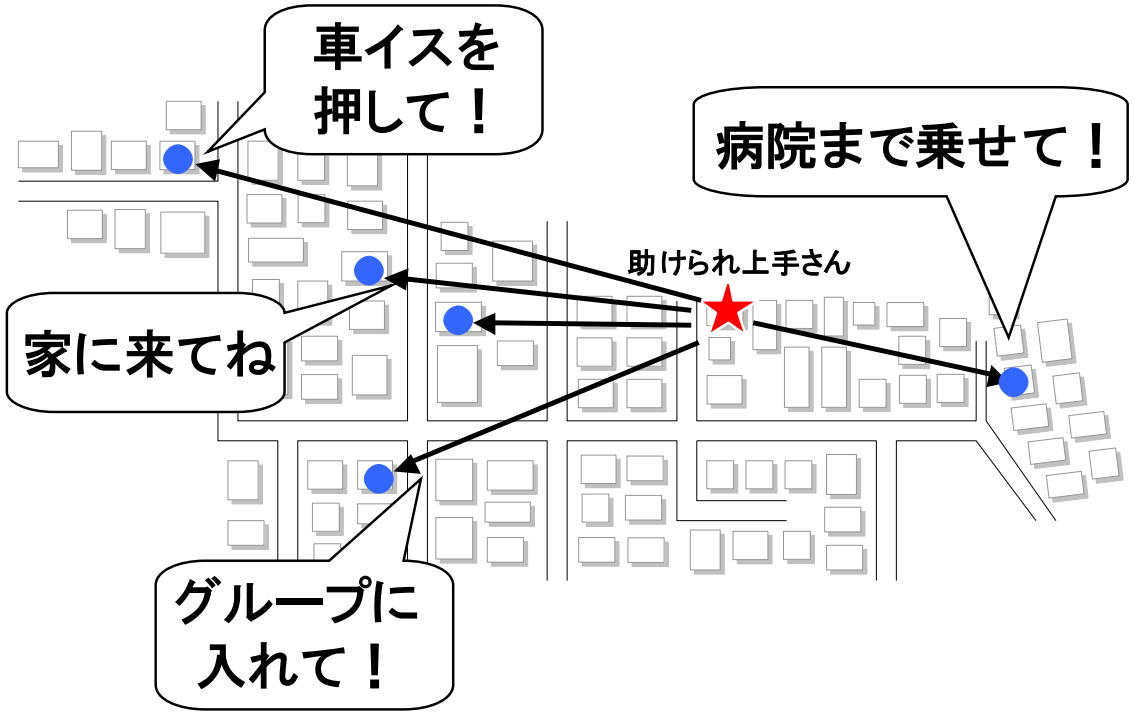
「やさしさのまちづくり」から「助けられ上手のまちづくり」へ

＜第2章＞福祉は「助けて！」から始まる

⑴ご近所さんにいろいろお願い事をしている主婦がいた

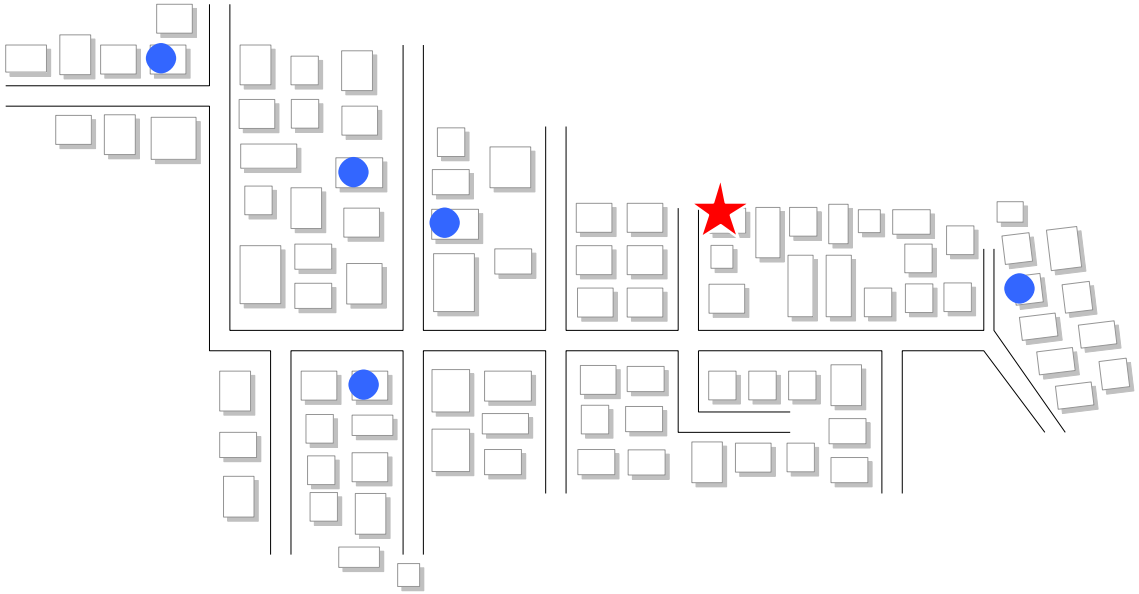
高齢で車椅子の夫を介護する主婦が、ご近所の５人の女性に、それぞれしてほしいことをお願いしていた。

この５人に、「正直、A子さんにやらされているようで、いやな気分になったか？」と聞いてみると、「いいえ、私たちは何をしてあげたらいいのかわからないから、むしろ助かった」というのだ。



⑵もし、Ａ子さんが５人に何も発信しなかったら？

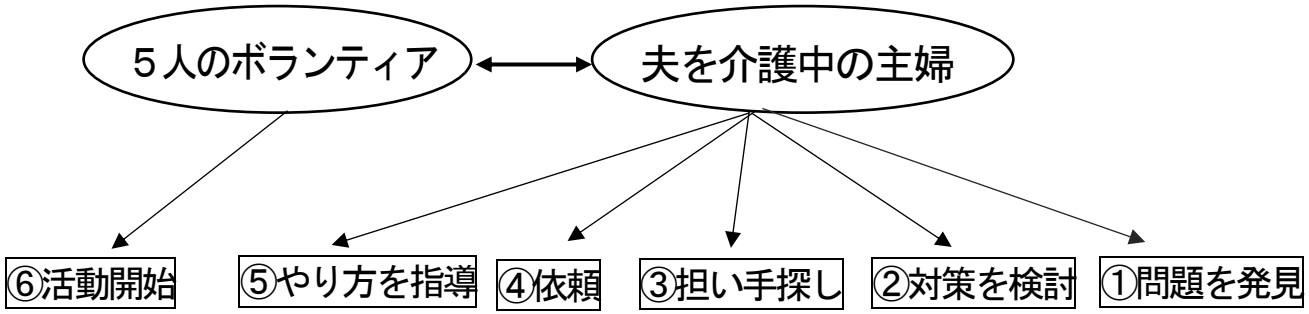
もしＡ子さんが５人に何も言わずにいたら、どうなっていたか。このマップのようになる。夫が要介護で車椅子の夫婦がいるということだけはわかるが、夫婦がどういう状態なのか、何に困っているのかは、さっぱりわからないから、助け合いは始まらない。



⑶Ａ子さんは意外や、５種の福祉活動をしていた

Ａ子さんが５人に声をかけたおかげで、双方とも福祉活動をすることができた。両者が福祉活動をしたのだ。一方は担い手としての活動、もう一方は受け手としての福祉活動である。

Ａ子さんが実行した行為を並べると、以下のように５つある。図のように、①問題を分析する。②対策を検討する。③担い手を探す。④候補者に依頼する。⑤やり方を教える。



＜第3章＞福祉は担い手と受け手の共同作業

⑴多くの役割を受け手のほうが担っていた

■私たちは、福祉活動をしているのは担い手で、受け手はただその活動の対象にすぎないと、長い間思い込んできたから、急に両者は共同作業だと言っても、ピンとこないのではないか。

■いま紹介したA子さんが担っていた役割を振り返ってみると、要するに福祉活動の多くを担い手でなく受け手の方が担っていたという驚くべきことが見えてきた。

⑵福祉がうまく行かないのは、受け手の沈黙

今の福祉がうまくいかないのは、本来、福祉は受け手と担い手の共同作業であるべきなのに、受け手が沈黙していることによる。彼らが担うべき部分が多いのに、その部分が空白になっているからだ。

⑶受け手側の役割とは…

①支援の仕方を教える－認知症になった女医がチラシづくり

英国で総合診療医をしていたジェニファー・ビュートさん（67 歳）は、認知症と診断された後、これから自分をどのように支援してほしいのかを具体的にまとめた「認知症である私について」というチラシを作り、家族や友人に配った。

②支援しやすいように工夫－「裏口から入れば、すぐに寝室があります」

住民との懇談で、「災害時に助けてもらい易くする工夫」を聞いたら、出てきた事例。

①寝ている場所や非常時の出入り口を、ご近所に知らせておく。

②要介護の夫を、何かあった時にすぐに助け出してもらえるよう、１階の出入り口に近いところに寝かせている。

③昼間独居の世帯から、「災害が起きた時は裏口から入ってもらえば、すぐ寝室があるから、そこから助け出して」と申し出が。

③「母のことをよろしく」－一人暮らしの母親のことを隣人にお願い

H子さんは、隣町に一人暮らしをしている母を、妹と交代で訪問しているが、そのとき必ず、ご近所廻りをする。

「いつも母のことを見守っていただいて、ありがとうございます」と言ったら、隣人はこう答えた。

「あなたがこうやって来てくれるので、私も気兼ねせずにお母さんの家に上がれるのよ」。

＜第4章＞自助とは「助けられ上手」のこと

⑴「天は自ら助くる者を助く」ではなかった！

■自助と聞くと思い起こすのはこの言葉だ。

■自助とは「だれの助けも得ずに、自力で問題を解決すること」という定義もあるが…

⑵必要なら人の助けも得て、身の安全を図ること

■すべての問題を自分だけで解決することはできないし、要援護の人はなおさらだ。

■だから自助とは、「必要なら人の助けも得ながら、自分の問題を解決すること」とするべきだ。

■大事なことは、人の助けを得ても、とにかく自分の問題を自分で責任を持って解決したり、身の安全を図ることなのだ。

⑶自助力とは、助けてもらうテクニック、つまり助けられ上手さん

■特に要援護になると、抱えている問題の多くは、自力だけでは解決できない。

■となると、自助というのは、自力で解決することが重要なのではなく、それを人に上手に助けてもらうテクニックということになる。

⑷助けられ上手さんとはこんな人

①徘徊する夫を見守ってもらうため、マンションで説明会

新潟市では、認知症で徘徊が激しくなった夫を見守ってもらうため、マンション中の人を集めて、協力を求めるための説明会を開いた主婦がいた。

②母が認知症になった時、ご近所まわりをして支援を依頼

多治見市のある男性（７６歳）は、９０歳になる母親の様子が気になり、医師に診せたら、認知症の初期症状だと言われた。「自分だけではこの先、支えきれない」と思った彼は、その足でご近所まわりをして、「母がこういう状態なので、見かけたら気をつけてほしい」とお願いしたという。

＜第5章＞やっぱり「人助け」の方がいい

ここまでは、助けられ上手のことを述べてきた。助けられるのも福祉活動であり、福祉は助けと助けられの共同作業だと。ところが地域で要援護者の行動を見ていくと、もう１つの活動パターンが見えてくるのだ。

⑴人助けに励む要援護者。なぜ？

同じ要援護者の活動でも、こちらは助けられではなく、助け行為である。要援護になったのだから、普通なら自分が助けられることを考えるものだが、一途に人助けをしようとしている人もいるのだ。一体どういうことなのか。

要援護になれば、否応なく人に助けられる。有難いのは間違いないのだが、その分、どうしても人間としてのプライドが傷つく。要介護になればなるほど「借金」はかさむ。これではたまらない。誇り高い人ほどこれが苦痛になる。もう１つは、そうしたプライドの問題以前に、生まれもって人助けが好きな人もいるのだ。世話焼きの要援護者である。

⑵これも結果としては助けられ上手さん？

自分は助けてもらおうとは思っていないが、一生懸命、人助けに奮闘している要援護者を、まわりはやっぱり助けたいと思って動き出す。だからこの人も、結果としては助けられ上手と言うことができる。

⑶人助けをしている要援護者とは？

人助けをしている要援護者とは、どういう人なのか。ここに４つの事例を紹介しよう。

＜事例①＞要介護の本人は人助け三昧。それを周りが支えるという構図

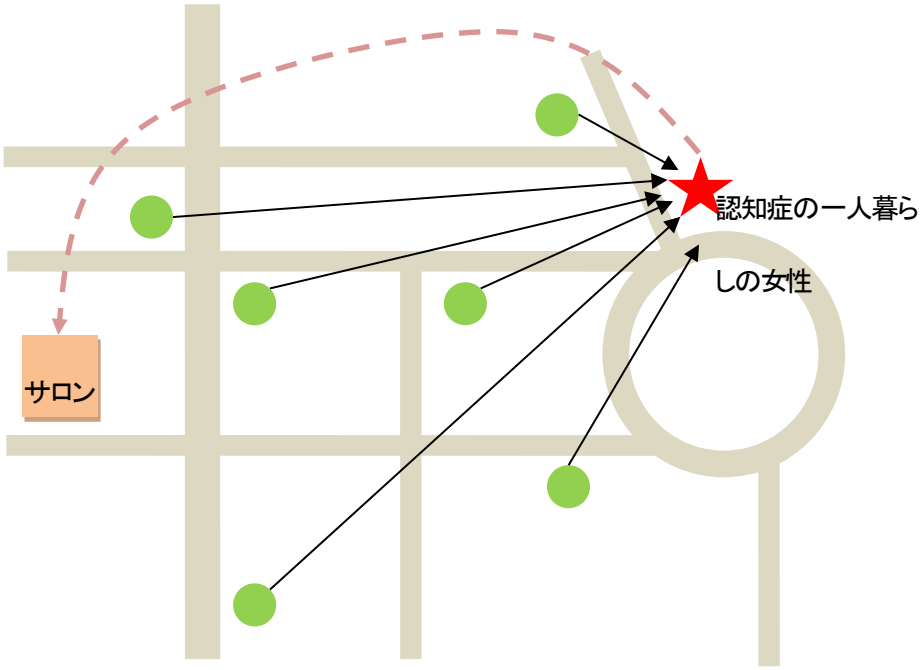
福井市で見つけた人物。これまで長い間、人助けに精を出してきた女性で、一人暮らしで認知症になった今も同様だ。一方で、そのお返しをするように、周りのたくさんの人が彼女を支えている。面白いことに、彼女の家にはたくさんのシニア男性が訪れて、今も「面倒を見てもらって」いる。彼女に必要なのは、活動の対象者なのだ。

＜事例②＞「人助け」と「人助けの支援」が同時に行われている

認知症の一人暮らし女性が、自宅を開放してふれあいサロンを開催している。参加者に動機を尋ねたら、「彼女の見守りがてら」ですと。

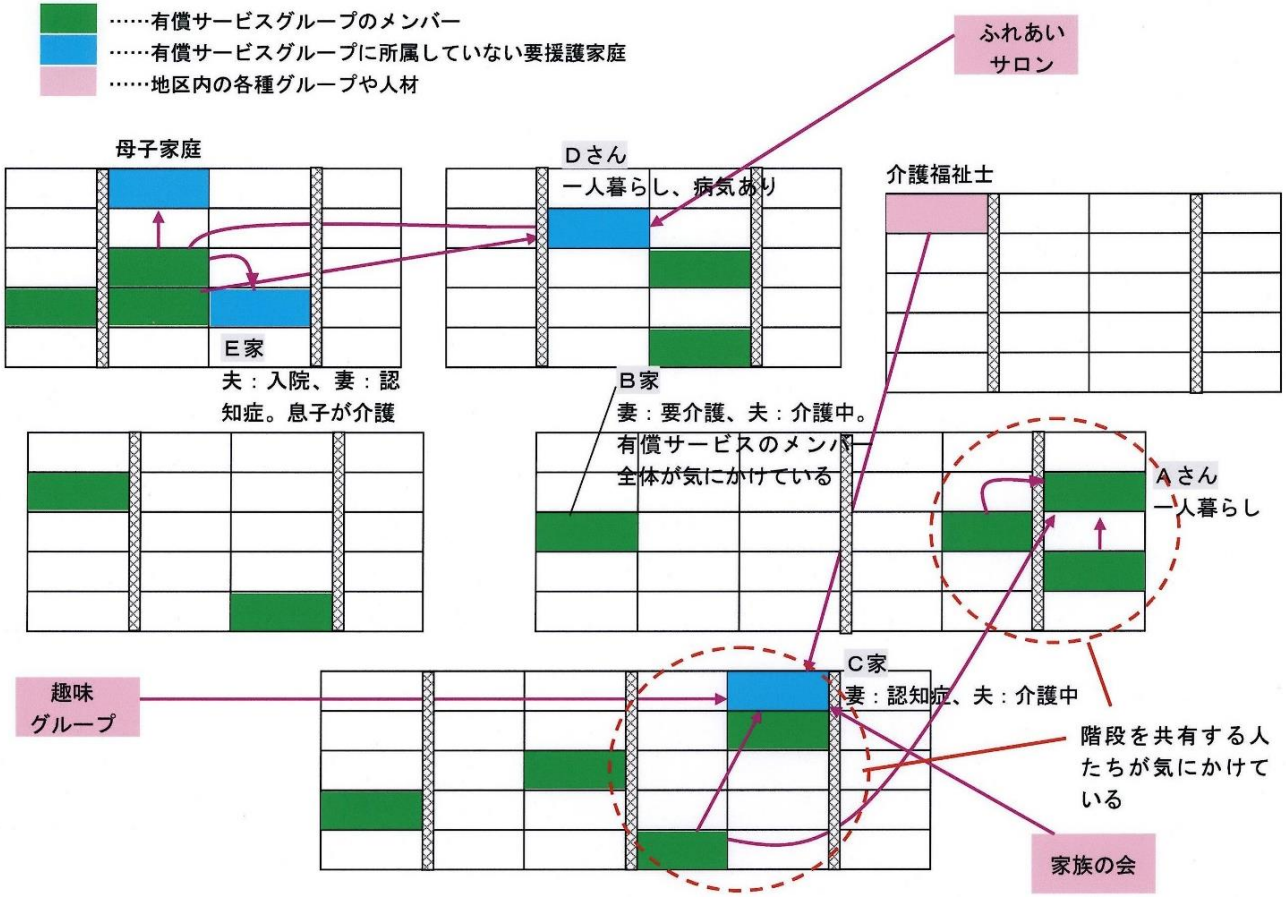
じつは、マップの左端の公会堂では町内会主催のサロンが開かれていて、ここにその認知症の女性がやってきて、「うちのサロンにも来ないかい？」と誘いをかけていたのだ。だから彼女のサロンには、掛け持ちの人も少なくないだろう。

●の印の人が彼女のサロンの参加者だ。「見守りがてら」の人も少なくないはずだ。認知症の女性のボランティア活動のサポーターと言っていいだろう。



＜事例③＞自身は介護グループで活躍する一方、仲間が妻に関わってくれる

妻を介護中の男性が、有償の介護サービスグループに参加していた（マップの集合住宅のＢ家）。夫は妻の介護の傍ら、サービス活動に参加し、その一方で、グループの仲間が妻を見守ってくれている。交換条件ではないが、結果としてそうなってしまった。


……有償サービスグループのメンバー
……有償サービスグループに所属していない要援護家庭
……地区内の各種グループや人材
ふれあいサロン
母子家庭
Dさん
一人暮らし、病気あり
介護福祉士
E家
夫：入院、妻：認知症。息子が介護
B家
妻：要介護、夫：介護中。
有償サービスのメンバー全体が気にかけている
Aさん
一人暮らし
趣味グループ
C家
妻：認知症、夫：介護中
階段を共有する人たちが気にかけている
家族の会

＜事例④＞デイサービスセンターでボランティアの認知症の女性に所長が付き添い

デイサービスセンター所長の高橋成行さん。利用者の１人、認知症の女性が週５日で限度に達してしまった。これ以上はサービスを入れられない。そこで彼が考えたのが、もう１日はセンターに「ボランティア」として通って

来てもらおうということだった。室内のお掃除をしてもらい、替わりに昼食を提供する。

しかし、掃除の仕事はすぐに終わってしまう。残りの時間をどうしたらいいか。近くに商店街があるので、そこのゴミ拾いをしてもらおうとなった。彼女１人でやらせるわけにはいかないからと、所長自身も付き合うことにした。出かける際に商店街にこのことをメールで伝えて、それぞれの店を通った時にさりげなく見守ってもらう。こうしておけば、いずれ１人で徘徊するようになった時に、店の人たちに見守ってもらえる。

⑷要援護者のボランティア志向を温かく受け入れる地域

これまでは要援護者の社会参加を温かく受け入れる地域づくりという発想はあったが、要援護者がボランティアをしたいというのを温かく受け入れる地域づくりというのは、考えられていなかった。両者は似ているようで違う。

ボランティアしたいという要援護者をどう支えるのか。これは単なる社会参加ではない。「ボランティア」をしたいというのだから、その場や対象を見つけてあげなければならない。しかもそこで要援護でも活動できるように、環境を整えなければならない。さらに、要援護状態なのだから、身体的にも支えなければならない。

そんなに面倒なことをしなければならないのかと言いたくなるかもしれないが、そこまで面倒な支援をしなくても役に立ってしまう活動対象を探せばいいのだ。そして、本人がしてきた仕事や趣味、特技などを生かせればもっといい。

①福祉施設の場合は、要援護者が利用している施設に利用者が役に立つ仕事はいくらでもあるのではないか。

②ボランティア活動の対象になっている人の場合は、その活動に参加してもらうことで役に立てるだろうし、要援護者もできることがいろいろあるはずだ。

③一般的に言って、活動する側に対して、活動のあり方、問題点を指摘したり、提言をするのなら、ハンディはほとんどない。

④認知症の人の場合も、前項が活用できる。

⑤当事者同士の助け合いをセットするという手もある。見守りなら、相互見守りも可能だ。

⑥福祉は担い手と受け手の共同作業に関する章に、受け手ができることがたくさんある。

<第6章>当事者による助け合いの意義と課題

1.当事者による助け合い（自助同盟）のご近所づくりの意義

⑴これは最後の地域福祉。この後はもうないということ

■このテーマに取り組むということは、地域福祉の最終段階に取り組むということである。

■地域福祉の最終段階とは、

①当事者が主役となって福祉をつくっていくということ。

②当事者にとって最も福祉がやり易いご近所を舞台に福祉をつくる。

③そこに福祉のワーカーが結集して当事者の福祉の営みを支援する。

⑵地域の福祉のさまざまな欠陥がこれで解消される

どういう欠陥が解消されるのか。

①当事者が主役の位置を占めたために、主役として積極的にニーズを発信するので、問題が現れやすいし、取り組みやすいし、解決しやすい。

③必要な人材は当事者が個々に見込むので、しかも当事者が直接担い手に指示するので、当事者の望むような解決策が得られる。

⑶住民の当事者意識が強まるし、広がる

①一部の当事者が、当事者意識を強く持って行動しているのを見て、周りの住民も同じように当事者意識を持ち始める。

②地域の住民がこうして当事者意識に目覚めることで、いま要援護で自助に取り組んでいる当事者たちの行動に共感し、協力するようになり、当事者主導の福祉がますます広がっていく。

③やがて福祉はすべて当事者の側から考え、実践するものという考えになっていく。こうして福祉は益々最後の段階に近づいていく。

2.当事者による助け合いのご近所づくりの課題

⑴関係者も住民も担い手主導が当たり前になっている

①長い間、日本の福祉は担い手主導で進めてきたので、それが当たり前になってしまっている。当事者が主役として行動を始めると、これに抵抗する動きがどれだけ出てくるのかが気になる。

②担い手は大抵、市町村の中心部に拠点を作り、当事者にそちらへ来るように指示する。そのため、当事者にとっては重要なご近所という所に関心が向かない。関係者もなかなかご近所にまで足を運ばない。彼らにとっては圏域はあってないようなもので、一層と二層があれば十分と考えている。

⑵当事者主導を後押しする人材をどうやって発掘するか

①当事者が主役としてご近所をつくっていくには、それを後押しする人材が必要だ。担い手主導の福祉社会からどうやってこの人材を発掘するかが大きな課題となる。

②福祉関係者にこだわらず、思い切って住民の中から見つけることも選択肢の一つだ。これから福祉に関わる人に求められる知識や技術は、従来のものとは異なる。住民が培ったノウハウを本物の技術として活用していくのも大切なことだ。

<第7章>自助を実践し易いエリアをつくる

1.ご近所は自助行為がし易い舞台

当事者が自分の身を守るために行動する場合、ご近所というのは、以下の理由で極めて都合がいい。

①互いの顔が見える。

②互いによく知っている。

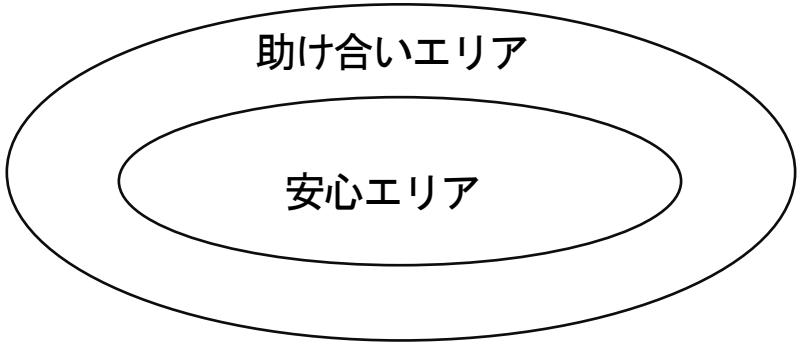
③近いので要援護でも交流ができる。

④相手も訪問しやすい。

2.「安心エリア」と「助け合いエリア」づくり

ご近所は、２つの層になっている。小さな「安心エリア」は10 世帯前後で、自分の安全を図るための最低限の範囲。もう１つは50 世帯前後の「助け合いエリア」で、この中に安心エリアがある。

当事者は何もしていないのではなく、最低限、「安心エリア」はつくっている。スケールの大きな人は、50 世帯ぐらいの規模の安心エリアをつくっている。



3.安心エリアづくりで工夫を凝らす一人暮らし高齢者

次に紹介するのは、山口県和木町の地域包括支援センターのスタッフが最近、一人暮らしの当事者（S子さん）と一緒に作ったマップ。彼女は更新申請で要介護度が下がってサービスを減らさなければならず、包括や民生委員が関わりながら、困り事の解決にご近所の友人たちの支援を得て、自立して生活できている。次ページのマップ。

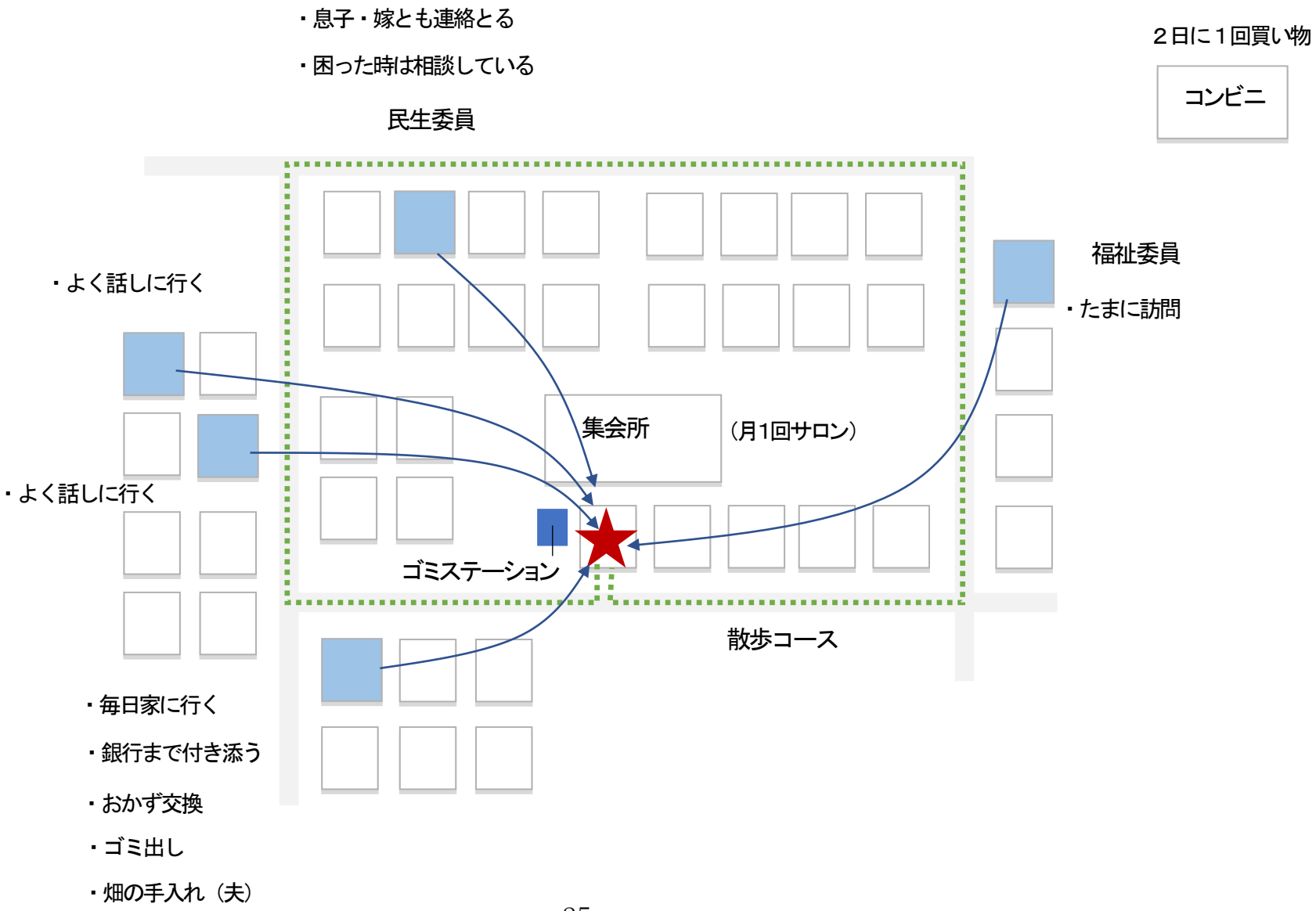
❶自宅のすぐ横にゴミステーションがある。以前はそれが嫌だったが、「今は近くで助かる」。

❷すぐそばに集会所もあり、そこで開かれるサロンに参加している。

❸散歩ルートには彼女を見守ってくれる人がいるし、

❹逆に彼女が見守っている相手（男性の一人暮らしの人）もいる。その他、

❺日常的に彼女の世話をしてくれる人も数名いる。


・息子・嫁とも連絡とる
・困った時は相談している
民生委員
２日に１回買い物
コンビニ
福祉委員
・たまに訪問
・よく話しに行く
・よく話しに行く
集会所
（月1回サロン）
ゴミステーション
散歩コース
・毎日家に行く
・銀行まで付き添う
・おかず交換
・ゴミ出し
・畑の手入れ（夫）

＜第8章＞本人と支援者で「自助マップ」作り

1.自分のためのライフデザイン・ノート

「私の自助マップ」にはいろいろな意義・目的が込められてある。

①当面の困り事を解決する。

「私の自助マップ」は、自身の課題発掘と解決のための作戦用ノートでもある。

②将来起こりうる困り事に備える。

危機管理ノートでもある。

③同じ困り事を抱えた仲間と一緒に解決する。

自助同盟の作戦ノートでもある。

④もっと豊かに生きる。

ライフデザイン・ノートでもある。福祉の指標を「問題への対応」からもっとレベルアップさせる。

⑤助けられ上手になる。

自分のための資源を確保しやすい資質や技術を習得するためのノウハウ。

⑥困り事が解決されるご近所をつくる。

助け合いのご近所づくりのノウハウを蓄積していく。

＜第9章＞当面の困り事を、仲間と一緒に解決

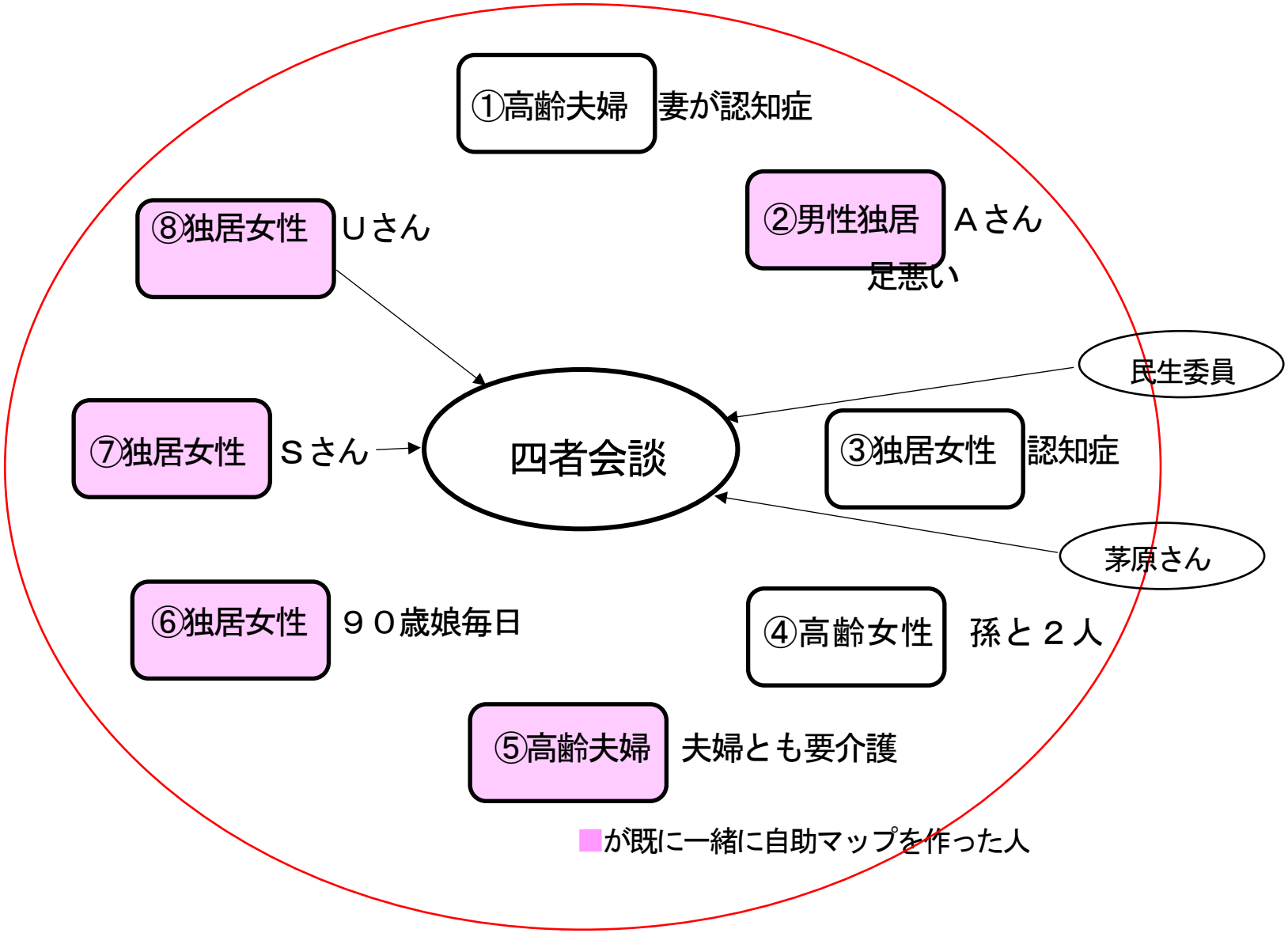
これについては、いま山口県和木町の地域包括支援センターの茅原史貴さんに１つの取り組みをしてもらっている。それを簡単にまとめてみよう。

⑴茅原さんによる事前接触と自助マップづくり

まずはご近所内の当事者が個々に自助マップを作ることから始める。茅原さんがお願いしたのが、２人の一人暮らし高齢者である。

⑵２人の当事者と民生委員、茅原さんが四者会談。テーマは買い物。

茅原さんが２人の一人暮らし高齢者（ＳさんとＵさん）と一緒に自助マップを作った後、その２人と民生委員に集まってもらって、２人の自助マップをつき合わせながら、四者会談をした。そこで話し合われたことの要点を以下に紹介してある。


①高齢夫婦
妻が認知症
②男性独居
Ａさん
足悪い
③独居女性
認知症
④高齢女性
孫と２人
⑤高齢夫婦
夫婦とも要介護
⑥独居女性
９０歳娘毎日
⑦独居女性
Ｓさん
⑧独居女性
Ｕさん
四者会談
民生委員
茅原さん
■が既に一緒に自助マップを作った人

＜買い物の不便は？＞

Ｓさん→歩行器でコンビニへ。ただし歩行器だとたくさん買えないのが困る。

→大きなものは？→Mさんに頼む

→買った大きいものを運んでくれるサービスはないか

Ｕさん→△△タクシーの〇〇さんなら、スーパーからタクシーまで運んでくれる

→ただし〇〇さんを指名すること

Ｓさん→今は他のタクシーだけど変えてみよう。

→他の人にも教えてあげよう

コンビニやスーパーに行って買い物をした時、１人では大きな荷物を運べなくて困るというＳさんに対し、Ｕさんから**△△タクシーには、スーパーからタクシーまで運んでくれる人がいる**→**ただし〇〇さんを指名すること**、という情報が提供された。体験に基づく具体的なアドバイスがされているところが、さすが当事者だ。

早速Ｓさんは、**今は他のタクシーだけど変えてみよう。→他の人にも教えてあげよう**となって、具体的な助け合いが始まった。当事者は日頃から困っているから、すぐに反応するし、他の人へも広がる。

＜移動の不便は？＞

Ｓさん→Ｍさんに頼む

　　→タクシー

Ｕさん→タクシー

　　→役場や保健センターはＫさんと

Ｕさん→バス停まで遠いから町内巡回バスに乗ったことがない。

民生委員→バス停でなくても手を挙げれば止まってくれるよ。

Ｕさん→それなら今度使ってみよう

町内巡回サービスがあるのは知っていたが、バス停まで遠いので使っていなかったが、民生委員から、**バス停でなくても手を上げれば停まってくれる**という情報が出されて、Ｕさん**→今度使ってみよう**となった。この情報も他の当事者へ広がっていくだろう。ここでも助け合いが始まる。

⑶煩雑な行政手続きをどうするかで３者会談

また、②の独居男性Ａさんと⑦の独居女性Ｓさんが、当事者同士で共通の困り事の解決策を一緒に考えた。それは「行政手続きで煩雑なものは１人では難しい」という問題で、具体的には、この地域は自衛隊があるので防音装置やエアコンを設置するのに補助金が出るが、この手続きが難しいということだ。

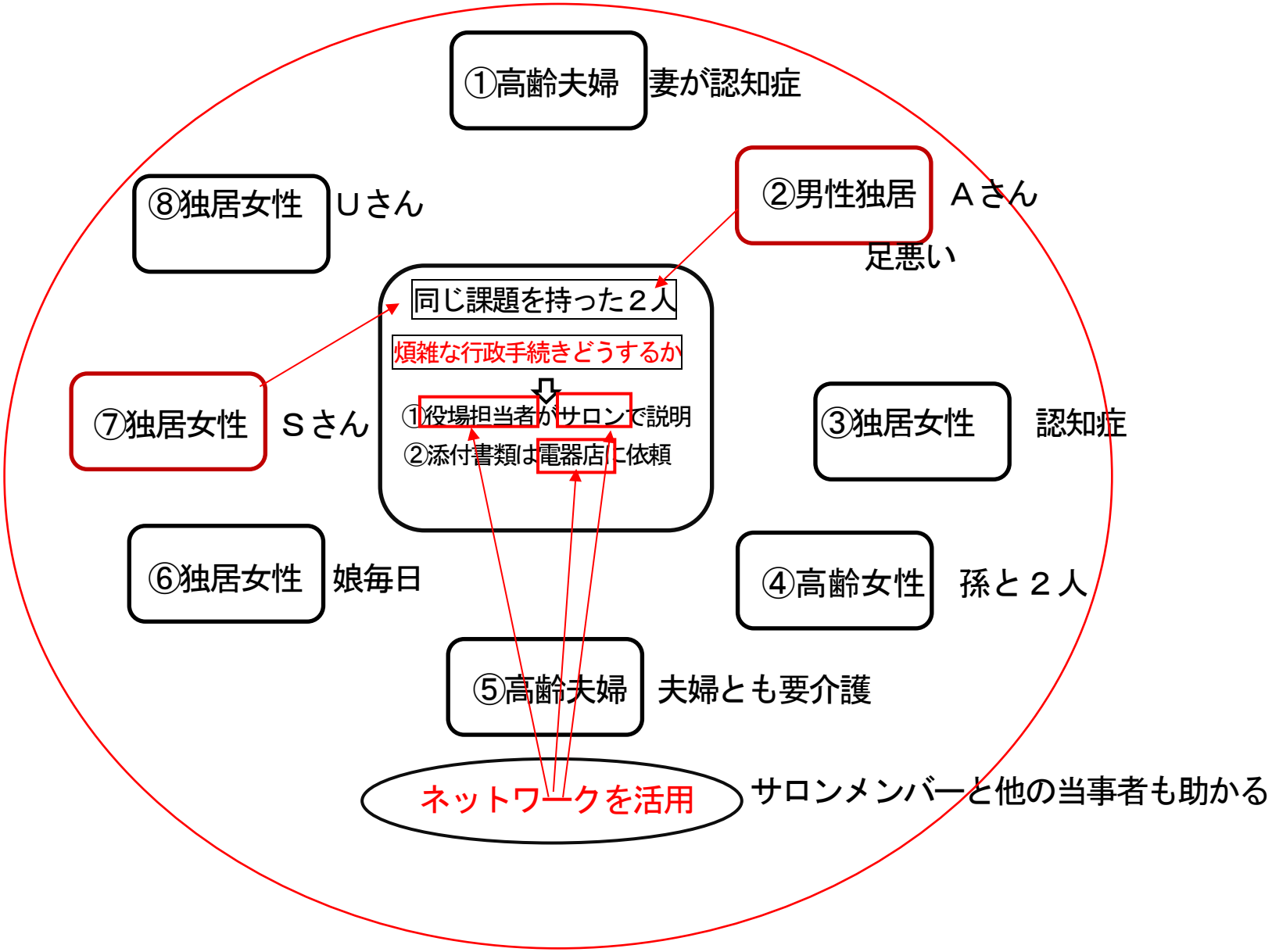
解決策としては、まずＳさんから「すでに申請した人に教えてもらったらどうか」という案が出て、Ａさんからは「同じように困っている人やこの制度を知らない人もいるから、サロンで説明会ができないか」という提案がされた。

そこでＳさんが実際に経験者に聞いたところ、①申請書は役所の人に教えてもらわないと難しかった、②ある電気屋にお願いすると添付書類をほとんど準備してくれるらしい、ということが分かった。

その結果、①役場の担当者にサロンで説明会をしてもらおう。そして②エアコンをその電気屋で購入することで、添付書類を準備してもらおうということになった。

これにより、２人だけでなく、同じ悩みを持つ他の当事者や、この制度を知らなかった人も助かる。

このようにして、当事者が中心になって困り事の対策を始めると、解決が早いうえに、その成果がすぐに他の当事者にも共有されていくことがよくわかる。


①高齢夫婦
妻が認知症
②男性独居
Ａさん
足悪い
③独居女性
認知症
④高齢女性
孫と２人
⑤高齢夫婦
夫婦とも要介護
⑥独居女性
娘毎日
⑦独居女性
Ｓさん
⑧独居女性
Ｕさん
同じ課題を持った２人
煩雑な行政手続きどうするか
①役場担当者がサロンで説明
②添付書類は電器店に依頼
ネットワークを活用
サロンメンバーと他の当事者も助かる

＜第10章＞公助と自助をつなぐ「自助同盟」

⑴「自助同盟」という助け合い方とその生かし方

①当事者である８人それぞれが、このご近所で自助活動をしている。身の安全を守るための活動だ。

②サポーターが仕掛けているのは、その自助活動でみんなが協力し合うということだ。いわば自助同盟を結ぶようなもので、仲間と一緒に資源を確保することもやるし、自分が確保した資源をおすそ分けもする。確保した資源の情報を提供したり、資源の確保の仕方を教えたりもする。

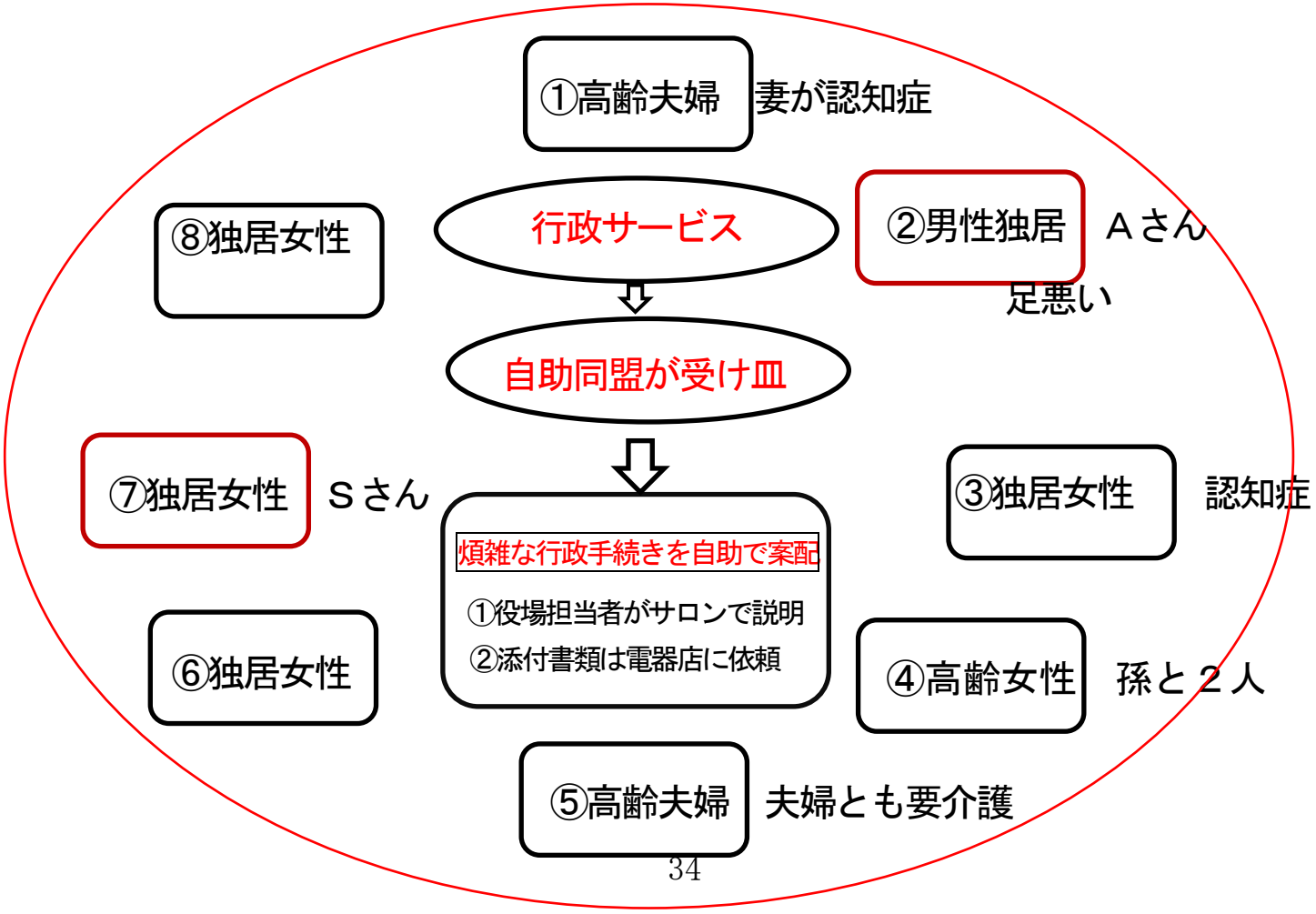
③自分もほしいから、自分が確保した資源を仲間におすそわけもする。

①面倒な行政サービスを自助同盟が引き取って、個々が受け取り易くする

自衛隊の基地が近いため、町が各家庭向けに実施している防音装置設置への補助だが、申請の手続きが複雑で住民は困っている。特に一人暮らし高齢者や要介護の高齢者にはとてもついていけない。元々、公的サービスにはそういう傾向があるのは仕方がない。サービスを組み立てるとき、住民一人ひとりの個人的な事情は考えていられないからだ。しかし住民は困る。考えてみれば、公的サービスが住民に受け入れられてないのは同じような理由だろう。両者のすれ違いをどう解決したものか。

②自助同盟が「変電所」のような役割を

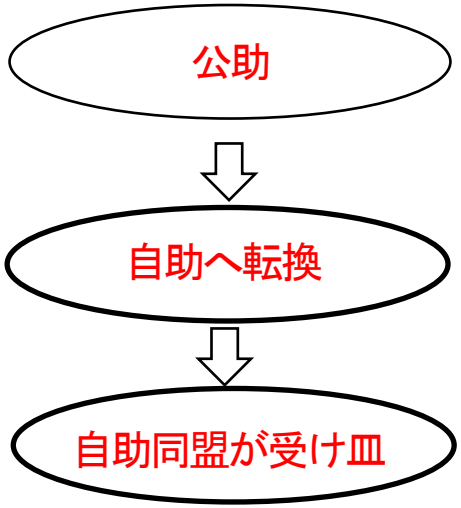
それに対する一つの回答がこれではないか。つまり、公的サービスはそのままとして、そのサービスを住民に直接届けるのでなく、住民の身近な圏域であるご近所で、そこの自助のグループがいったん受け取り、住民に受け入れやすい形に変えて、それから個々の住民が各自のやり方でサービスを確保する。公助を自助に転換するのだ。



③公助と自助を直接結ぶ初の試み

これまで公的機関がサービスをつくったものの、それをどこからどのようなルートを経てこのサービスを受け取りに来るのかが決まっていなかった。公的機関は従って、ただ福祉センターでそれを受け取りに来るのを待つだけ。

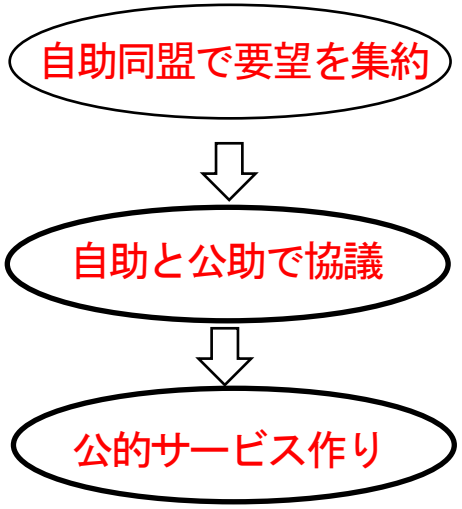
ところが当事者が自助という衣服を来て、自助同盟という乗り物に乗って、公的サービスを自身で受け止める体制をつくった。といっても、当事者たちがこの同盟の中で一体となって行動するわけではない。それぞれの希望や考え方があるから、一応、自助同盟という、ご近所毎に作られた同盟を通して公的サービスを受け止めようとはするが、やり方は個々まちまちで、数名で連合する人もいるし、１人で受け取ってしまう人もいる。



④様々な行政サービスや民間サービス、社協の事業にも適用できないか

煩雑な手続きが必要な場合に絞って説明してきたが、この仕組みは公助から自助へ転換したい場合のいろいろなケースにも使えるのではないか。今の福祉システムはすべて、実施する担い手の側にとって都合の良いようにつくられているので、なかなか住民がこれに反応してこない。こうなるとすべての住民サービス事業について、公助から自助へ転換するために、自助同盟に引き受けさせていくことはできないか。一つでも二つでも、使えそうな事業をこれに乗せてみたらどうなのか。社会福祉協議会の事業も同様だ。

といっても、このシステムは自助同盟である以上、ご近所という圏域ごとに別々に「変電所」をつくらねばならない。



⑤このルートを逆流できないか

逆流とは、今までは公的サービスの受け皿になって、当事者が消化できるように咀嚼して当事者に手渡していくことだったが、逆に当事者が抱えている福祉ニーズを集約し、サービスに形づくれるように「編集」し、自助同盟を通して公的機関に手渡していくことである。その前に自助側と公的機関による協議も必要になる。